

足を鍛える

山本 東次郎

能・狂言はすべて「型」という「決まり」で成り立っています。狂言は非常に抽象化された演技の能とは違って、泣いたり笑ったり、滑ったり転んだり、酒に酔って舞台の上に寝転んだり、様々な日常的動作があります。随分好き勝手にやっているように見えるかもしれませんが、こうした演技もすべて

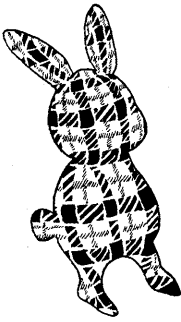
「型」で演じられているのです。

この頃の頃、私たち狂言師は狂言の稽古より前に狂言小舞の稽古が課せられ、謡と舞の基本を学びます。世阿弥はその著書『風姿花伝』の中で、能の基本として「舞歌ぶが二曲にきよく」、つまり舞と謡が重要であると述べていますが、それは狂言においてもまったく

同様です。謡によって科白の、舞によって所作の基本を作り、それによって能舞台にふさわしい品と格調を持たせ、どんなにくだけて見える演技でも、崩れたものとならないようにするのが、舞の稽古です。

最初に稽古する『盃』という小舞は、まず「大しょうま小前」(舞台中央後方、大鼓と小鼓の間より少し前の位置)に座り、そこから立ち上がって歩きだし、「正先」(舞台の前方中央の位置)で止まって、また後ずさりで元の位置まで戻るといって極めて単純なものです。時間にして一分少々、たったこれだけの中に実は狂言の基本中の基本である様々な要素が詰め込まれているのですが、その中の一つに、「左足で歩き始め、右足で止まり、そして右足で戻り、左足で止める」という決まりがあります。

出す方、引く方、止める方、そして掛



ける方の足の決まり。方向を変える時の足の動きを「掛ける」といいますが、左へ向くときにはまず右足を左足の爪先の先に送って、横向きに置き、それから身体全体をゆっくりと回転させて、左に九十度回りますが、その次に歩き出す時には決して、掛けた足(この場合は右足)から出してはいけません。また、何らかの意志を表すために、前方一步詰め寄るような時、どちらの足から出るか、逆に「びっくりした!」という表現には後ずさりですれを表現しますが、ぼんと一歩下がる、その時はどちらから引くか、そうした一々が実に細かく厳しく決められているのです。

私は今、横浜能楽堂で小・中学生に狂言の稽古をしています。彼らにもそうした一つ一つを厳しく教えています。将来プロになるわけではない素人の子どもたちに何もそこまで煩く言わなくても、と思われるかもしれませんが、些細に思えるこん

な決まりが狂言という舞台を作る上で非常に重要な意味を持っていると考えているのです。

どちらの足を出すのか、私もこどもの頃、稽古のたびにそれはたいへんな思いをしました。右か左か、確率は二分の一、ところが迷えば迷うほど逆の足を出してしまつて、ひどく叱られます。ですから足の一步を使うことに非常に緊張し、いつも神経を集中させていることとなります。

そしてまた、舞台の上を正しく美しく歩く、きゅつと上げた爪先で柔らかく、しかも強く舞台を打つように押さえながら舞台の板に擦り付けるように足を進めていく能、狂言独特の歩行術「ハコビ」、長い橋掛りを歩く時も舞台の上を回るときも、一步でも踏み損ねることがあってはいけない、そのためにいつもいつも全神経を集中して舞台に臨むのです。そうした緊張感が結果的に、コッペパンのようにぼわんとたるんだ足ではなく、きりりと引きし

まった足、能舞台に相応しい厳しい緊張感の漂う清々しい足を作り、そして美しいハコビを作つてきたのだと私は考えています。

極めて動きの少ない静的な表現を行う能・狂言では他のどのような演劇や舞踊とも比較にならないほど、緊張感が必要です。何もせずにじつと立っているということほど難しいことはありません。動いてはいけない、じつとしていながら、何ものかを訴えかけようとするのが能・狂言の演技です。いつも足の指で舞台を捉えている、私は父からいつもそう言われました。立っている時に常に親指に力がかかっているように、そして踵から土踏まずぐらゐまで紙一枚ずつと入るような気持ちでいろと。それは足腰の強靱さと共に、たいへんな緊張を要求するものです。しかしそうすることで、全身の神経とエネルギーがぐつと前へ向かつて放射し、無言のうちに何ものかを伝えることができるのです。

「緊張する」、この言葉は今ではあまり良い意味で使われることがなくなっていました。緊張して失敗した、実力を出せなかった、オリンピックでも入学試験でも言われます。日本人はすぐ緊張するか大舞台で良い成果を上げられない、だから緊張するな。私はそうは思いません。それは言い訳に過ぎない、緊張したくらいで出せない力なら、それは真の力、実力ではなかったのです。

緊張するな、あらゆる場面でそう言われるようになって、日本では少し前ならおよそ考えもつかないような愚かしい事故が次々に起こるようになりました。目立つところで大活躍できずとも、その代わりに日本では日常の些事のひとつひとつが正確に丁寧に行われていました。それは一人一人が緊張感を持って自分の仕事に臨んでいたからにほかなりません。

緊張とは、身体や精神を硬直させることではなく、全神経を一つに集中させること、雑念を払っ

て、澄み切った精神で今自分が対峙している物事に心を込めて取り組むことです。小さなこともないがしろにせず、全精神を今自分が行っていることに向かわせること、それは舞台のことだけではなく、生きていく上でとても大切なことではないでしょうか。

緊張感を持って生きている人が清々しく美しいのは言うまでもありませんが、また人生の大切な場面において正しい判断を下せる人であろうと思えます。私は自分の教えていることもたちに、そうした人間になってほしいと望みます。大袈裟かもしれませんが、狂言の稽古で一挙手一投足をないがしろにさせないのは、そう願っているからなのです。

(能楽師・大蔵流狂言方)